

## 特別支援教育（肢体不自由）における専門的知識・技能の習得を目指した授業の試み

特別支援教育講座 苅田知則

### 1. 講義の目標

本授業の目標は、脳性麻痺（CP）を中心とした肢体不自由児者の(1)疫学、(2)身体運動の発達と障がい、(3)言語聴覚面の発達と障がい、(4)摂食嚥下の発達と障がい、(5)教育上の配慮・支援、(6)社会制度・チームアプローチ等について、受講生が専門的知識を習得するとともに、自ら知識を整理し、実践する力を身につけることであった。教育現場においては、CP児に誤った対応を行うと、子どもの命を危険にさらしてしまう可能性もある。故に、現場に出る前に、医学・心理学等の基礎知識を習得することが不可避である。

### 2. 講義の進め方・内容

本授業は、以下の通り行った。なお、各回の復習として翌回に小テスト（5問）を行い、学生の授業外学習を促した。また、本授業は肢体不自由児への特別支援教育を実践する上で必要となる基礎知識を習得することが目的となるため、知識伝達型学習の比重が高くなる可能性があった。ただ、学生が能動的に知識を整理・再構築することは必要であると考え、授業の中でグループワーク（GW）を行い、自ら選択したテーマについて調べ、理解し、他者に説明する課題を設けた。

第1回：ガイダンス、肢体不自由の定義等の概説  
第2回：CPに関する基礎知識（疫学）  
第3回：乳幼児健康診査とCP  
第4回：定型発達児とCP児の運動発達と姿勢反射  
第5回：定型発達児とCP児の粗大運動の発達  
第6回：定型発達児とCP児の微細運動の発達  
第7回：CP児のタイプ分類（病型、重篤度等）  
第8回：定型発達児とCP児の言語発達  
第9回：定型発達児とCP児の摂食嚥下  
第9回：合併症等から派生する問題  
第10回：痙直型・アテトーゼ型CPの特徴と指導（GW）  
第11回：CP児に対する摂食嚥下指導（GW）  
第12回：CP児に対する言語聴覚指導（GW）  
第13回：CP児を支援する社会資源とチームアプローチ  
第14回：最終試験、及び総括  
第15回（補講）：CP児を対象とした支援機器

以下に、本授業で取り扱った内容を概説する。

#### (1) CP児の疫学に関する基礎知識

CP児に対して科学的根拠に基づいた教育実践（EBP）を行うためには、CPの疫学（病因、宿主要因、環境要因）について理解する必要がある。本講義では、CPの発症頻度、原因疾病、合併症、一次的・二次的障がい等について概説した。

#### (2) 乳幼児の定型発達と発達診断法

障がいが発見されやすいKey Monthについて説明し、神経学的チェック法、発達検査、知能検査等について、教科書と視聴覚教材（DVD）を用いて概説した。CP児が呈する異常反射等について説明を加える際、専門用語だけでは理解が困難であることが考えられたため、受講者も異常姿勢を体験し、専門用語とCPの臨床像をつなげる試みを行った。さらに、チームアプローチに関連して、作業療法士がCP児に対して指導する場面のDVDと見せ、保健医療福祉領域の専門職との連携の重要性について説明した。

#### (3) CPのタイプ分類

CPの麻痺部位による分類（単麻痺、対麻痺、両麻痺、片麻痺、三肢麻痺、四肢麻痺）と、病型による分類（痙直型、アテトーゼ型、固縮型、失調型等）について概説した。特に、病型による分類については、脳の損傷部位と障がい特性の関連について解説を加えた。

#### (4) 摂食嚥下、言語発達に関する基礎知識

定型発達児の摂食嚥下機能の発達を概説した上で、CP児が呈する摂食嚥下の障がい（乳児様嚥下、逆嚥下等）について解説した。また、摂食嚥下機能と発声発語機能の関連について説明し、言語聴覚士の手技を紹介しながら、口腔顔面運動の指導法を受講生同士で実演する機会を設けた。

#### (5) グループワーク

(1)～(4)で学んだ基礎知識をもとに、受講者が4つのグループに分かれ、CP児者の典型的な病型タイプ（痙直型、アテトーゼ型）の特徴、及び摂食嚥下指導、言語聴覚指導について、自らテキスト

ト等を読み、整理し、全員の前で発表を行うグループワークを行った。

以上の内容に加え、医学的な基礎知識を身につけるため、CPの原因となり得る疾病等について要約する小レポートを課した。最後に、期末試験を行い、小テスト、小レポート、期末試験の結果を総合的に判断して成績判定を行った。

### 3. 授業評価の方法と結果

期末試験終了後、受講生に授業評価アンケート（無記名式）を配り、以下の項目について質問した。教員研究室のポストに投函する形で回収し、28名中25名から回答を得た。なお、a) については自由回答、b～i) については4段階尺度（1＝ほとんどそう思わない、2＝あまりそう思わない、3＝かなりそう思う、4＝非常にそう思う）で回答するよう求めた。以下、授業評価で行った項目と得られた結果を示す（詳細は下図参照）。

- a) 一番記憶に残っている講義内容は何ですか？：  
グループワークの発表：7名、反射等の講義・実演：7名、摂食嚥下指導：3名、DVD等の視聴覚教材：2名、小テスト：1名
- b) 講義は、シラバスの到達目標が達成されたと思いますか？：平均値 3.4
- c) 教員の講義の進め方は、適切だったと思いますか？：平均値 3.2
- d) 教材の提示、資料の配付は適切に行われたと思いますか？：平均値 3.0
- e) レポートの内容は、適切だったと思いますか？：平均値 3.0
- f) レポートの量は、適切だったと思いますか？：平均値 3.1
- g) 教室の設備は十分だったと思いますか？：平均値 3.4

h) あなた自身は、講義に積極的に取り組むことができましたか？：平均値 3.0

i) 講義の内容は、あなたの役に立ちましたか？：平均値 3.3

### 4. 考察・まとめ

アンケートへの回答をみると、平均値が3.0を越えており、高い評価を得ることができた。特に、グループワークの発表や反射等の講義・実演が「記憶に残っている講義内容」として挙げられていることから、本授業で取り入れたグループワークや実技型の授業内容が、学生の学習にとって有益だったことが示唆される。

あわせて、本授業では、CPに関する医学・心理学・福祉工学的基礎知識がわかりやすく解説された「言語発達障害Ⅲ 言語聴覚療法シリーズ12 改訂版（笠井新一郎編著）」を教科書として使用した。肢体不自由児の心理・生理及び病理を理解する上で、医学的・心理学的基礎知識を習得することは不可避である。しかし、教育学部生にとって、医学領域の専門用語を理解することは容易ではない。ただ、以上のアンケート結果を鑑みるに、わかりやすい教科書を用いることで自習を容易にし、授業中に実技型学習とグループワークを取り入れることで、受講生の主体的な学びを促進することができたと考える。

今後の課題として、例年、本授業は特別支援教育教員養成課程以外の学部生も受講している。他課程の学生にとっては、医学・心理学的専門用語が難解で、習得に時間を要している。今後は、更にDVD等の教材を充実させたり、授業外学習を支援するためにe-learningシステムを活用したりする等の授業改善に努めたい。

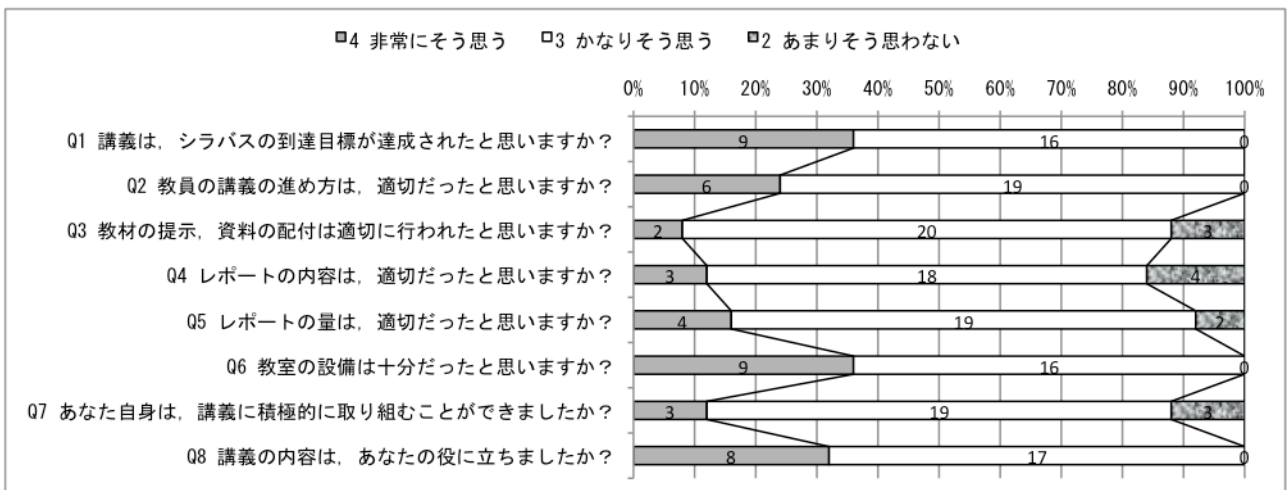


図 授業評価アンケートの結果